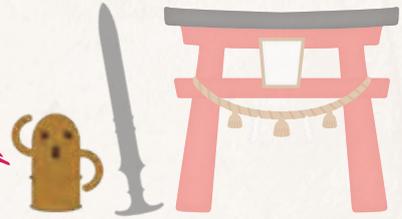


# むかしむかし 昔々の そお市

郷土を知る

社会教育課 文化財係 ☎ 099-482-5958

第17回



## 生誕200周年 幕末の志士

ありまこうけん  
有馬厚軒 (前編)

**有**

有馬厚軒という末吉の偉人を御存じでしょうか。

有馬厚軒は文政4年（一八二二）10月5日、道憲の次男として、二之方荷原に生まれました。今年はこちらで生誕200周年となります。

諱（実名）は純温、幼少は七郎、通称厚助、号して厚軒・亀山を名乗りました。（※ここでは厚軒で統一して表記）

厚軒は、医者である父道憲より医学や漢学を学びました。その後、鹿児島島の造士館に入学し、弘化2年（一八四五）11月、有馬新七らと共に遊学のため京都に上ります。資金に困り、勉学の傍ら按摩をしたり、食べ物が無くおからを食べたりして辛抱することもありましたが、朱子学・国学を修めました。

有馬新七は文武両道の傑物ですが、過激な尊王攘夷派としても知られ、多くの志士たちと交流していました。

厚軒は新七に共鳴し、まさに幕末の志士として活動します。嘉永2年（一八四九）帰郷しますが、その後も、新七と手紙のやりとり

をしていました。

国の未来を憂えていた厚軒は、同じく尊王攘夷派の有村次左衛門とも親交があり、安政7年（二八六〇）、時の大老井伊直弼（二八六〇）の殺（桜田門外の変）に参加しようとして、密かに家を出ましたが、福山街道（小倉あたり）で連れ戻されています。

大老暗殺後（有村次左衛門は本懐を遂げて死亡）、世の中が目まぐるしく動く中、有馬新七は、諸藩の尊王派志士らと共に謀し、公武合体派の関白や京都所司代の襲撃計画を立てますが、同じく公武合体をもくろむ島津久光によって粛清（寺田屋事件）されます。時に文久2年（一八六二）4月23日の出来事で、厚軒は翌月8日にこの凶報を知ります。



有馬厚軒居住之地の碑



末吉市街地には有馬厚軒に関する2つの石碑があります。

実は厚軒は、この件に当初から関係しており、前年の12月27日には、鹿児島島の坂元幽齋宅で、坂木六郎や新七らと密議をしています。しかし、厚軒はこの後病気に罹り、新七らと行動を共にすることが叶いませんでした。奇しくも二度の歴史的事件を生きた形となった厚軒ですが、この後、末吉の偉人と呼ばれるようになります。